

# 護法祭：民俗学の視点からみた現代における昔からの奇祭

## ——その存続のための変化——

セルモ・コリーヌ

### 初めに

護法祭は、鎌倉中期から、岡山県美作地方において行われる宗教儀礼である。元々約10ヶ所の寺で執行されていたが、現在は3ヶ所で行われなくなった。私は、最も典型として有名な二上山両山寺の護法祭について研究している。護法祭の起源は、修験道の夏の峰入りという山岳修行の最後に行われていた「験競べ」（げんくらべ）だと考えられている。多くの研究者は、この護法祭を古代日本におけるシャーマニズムの残存したものとして重視している。

これまでの研究では、現代日本における護法祭を通して古代日本の修験道史・シャーマニズム史を理解することを目指されてきた。私は、昔からの儀礼が現代日本に存続しえるための変化・調整（ajustements）に興味を抱き、護法祭の現在のあり方に研究を絞ることにした。調査方法は、主にフィールドワーク（2006年に一週間と2007年一ヶ月間の観察とインタビューの分析）に基づく。本発表では、儀礼のいくつかの段階を取り上げながら、護法祭の変化とその「演劇化」または「観光化」（spectacularisation）を検討したい。

### 護法祭とは

まず、護法祭を簡単に紹介しよう。護法実（ごほうざね）という人物が護法祭保存会に選ばれて、行事の一週間前から両山寺で苦行（精神料理・水垢離・寺院の巡拝・祈り・会話禁止）を始める。その間、お寺の檀家を含む地元の人が祭りの準備をする（境内の掃除・マイク、アンプと提灯の装置・儀礼の道具作り）。護法祭の当夜（8月14日）、両山寺の住職、近くの修験者と役持ち（儀礼の中で役割を与えられている者）が行列を組み、山奥にある護法善神社で待つ護法実を迎えに行く。その後本堂に戻り「お祈り憑け」が行われる。憑依は、住職が経を唱え、修験者が錫杖を振る、役持ちが太鼓を敲き、ケイゴといわれる子供たちが「バラオン・サラオン」と叫びながら護法実の周りを走り、その手段によって、護法善神（護法様とも言う）を護法実に乗り移らせることでなされる。憑依の直後、護法実が境内へ飛び上がり、鳥の動きを真似し

て観客の間を走る（「お遊び」または「護法飛び」という）。それが20、30分間続くと、護法実の本堂へ帰り、修験者に神を落としてもらう。最後に、最初と同じく行列を組み、護法善神社へ行き、そこで散会する。この儀礼は人々の快樂、天下泰平と五穀豊穰を祈りながらも、不浄の者がいれば、「お遊び」のとき、護法様に捕まれ、3年以内に死亡すると言われている。

### 宗教儀礼の演劇化・観光化

護法祭が演劇化していると思われるのは、宗教儀礼に俗の要素（太鼓の演奏など）が加わる現象だからだ。

### 参加者の拡大化とその結果：

元々、準備に参加するのは、両山寺の檀家であるよりも、地域の人である基準の方が重要だったらしいが、現在は、檀家であれば、5年間準備に参加することをお寺から頼まれている。儀礼の執行に人手が必要のため、この制度を通して、過疎化していくこの地域における、護法祭の存続性を高めている。

準備だけでなく、観客の質も変わってきた。どこでも同じような現象だが、昔は現場の人に限っていたある地域の独特の祭りが、現在では、国（世界）の隅々からの観客を引き寄せる。すると、あるコミュニティの宗教儀礼のレベル（つまり守護神を祀るための儀礼というレベル）に、よその観客が加わることで、民俗的な儀礼というレベルも現れてくる。つまりある地域の本来の象徴的な儀礼より一層広いレベルが現れてくるのだ。

観客の拡大化にともなうもう一つの現象が、儀礼の意味・機能を観客に伝える方法の変化である。元々は地元の人々が子供の時から護法祭に参加して、儀礼を代々伝えていた。ところが、現在、準備に参加する檀家の全員が護法祭に慣れ親しんでいるというわけでもなく、よその観客は、さらに護法祭に関する知識がない。この新たな状況に適合するための二つの変化が見られる。まず、マイクの使用。現在、儀礼の各段階はマイクで説明される。もちろんそれは余所の観客を対象としている。もう一つの変化が「お遊び」の時に見られる。上に述べたように、不浄の者が護法様に捕ま

れるのだが、新しい観客を儀礼に組み込むため、「不浄性」の解釈が拡大されてきた。現場の人の多くにとっては、昔と同じく、生物（肉、魚類）を食べて護法祭に行くのは不浄な行動だが、よその人はそれを知るわけではない。そこで、「不浄性」を、その場でとる態度を通して表すようになった。つまり、不浄性が悪い行為（護法実足に足を引っ掛ける、護法実のかぶっている紙手（しで）を引っ張るなど）という、より広い範囲へと拡大してきたのである。

この二つの現象は、護法祭の主催者の意図を表すと思われる。つまり、よそから来る人も一時的にコミュニティに加入することができるように、必要な情報を提供するという意図である。

#### 演劇化：

宗教儀礼に加えられる三つの俗的な要素とは、盆踊りと太鼓の演奏と籤である。盆踊りの宗教的な根拠を無視するわけではないが、両山寺の護法祭では、宗教性はみられない。そこで、なぜ護法祭とは関係ないそれら二つの「演劇」を取り入れるようになったのかと地元の人に聞いてみると、観客が儀礼の始まりまで「退屈しないように」という返事が返ってきた（護法祭は夜11時ぐらいから始まる）。つまり、儀礼が始まるまでは観客を楽しませる必要があると主催者が思っている。と同時にイベントの種類が多いほど、様々な観客を引き寄せるチャンスも高まるとも言えよう。昔は護法祭は、一年で唯一と言っていい行事であり、地元の人々が多く来ていたが、娯楽が増えた現在では、

人を両山寺まで引き寄せるための手段が必要になった。こうして見れば、護法祭の演劇化は、前に述べたように参加者の拡大化の結果と考えられるだろう。

#### 結論

本発表では、護法祭の存続に関わる変化を示そうとした。護法祭は、昭和52年（1977年）に県指定重要無形民俗文化財となった。上にも述べたように、死亡に関する信仰があるため、国指定になりがたいらしい。

さて、一時的な結論として、儀礼の観光化・演劇化（spectacularisation）について一言触れたいと思う。どの儀礼についても、読み方のレベルが3つあると言える。まず、儀礼としての儀礼、つまり、儀礼を執行するコミュニティのレベルにおける、五穀豊穡であれ、雨ごいであれ、快楽であれ、ある目的で行われる儀礼の読み方がある。そして、ある地方の民俗的な習慣としての儀礼、つまり、象徴的な儀礼のレベルがある。最後に、ある国全体の象徴的な儀礼のレベルが見られる。例えば一昨年、備中神楽がパリで演じられたが、元々岡山県備中地方の宗教儀礼である神楽を、外国で演じると、外国人にとっては日本文化全体を表す儀礼となる。つまり、儀礼の内容よりも形式が重視されるのが演劇化なのである。護法祭もその三つのレベルで分析することができるが、本発表では、祭りの二番目のレベルー演劇化ーの結果、つまり、祭りの存続に関わっている色々な変化に話を絞った。